

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

7. 文化資源研究センター

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2017-03-10 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008427

7 文化資源研究センター

文化資源研究センターの設置目的

文化資源研究センター（英語名 Research Center for Cultural Resources）は、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて調査や研究開発をおこなうとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整をおこなうことを目的として、2004年4月に設置された。

文化資源には、人間の文化にかかわるさまざまな有形のモノやそれについての情報のほか、身体化された知識・技法・ノウハウ、制度化された人的・組織的ネットワークや知的財産など、社会での活用が可能な資源とみなされるものが広く含まれる。こうした文化資源を人類共有の財産とすることで、グローバル化する世界で人びとが異なる文化への理解を深め、互いに共生していくための基盤を作り出そうというのが、文化資源研究センターのめざすところである。文化資源研究センターは、独自に研究事業を企画・運営するほか、文化資源関連事業として、館内、館外の研究者が参画して実施する多様な文化資源プロジェクト等の企画・調整を通して、文化資源の運用全般に寄与することを役割としている。

文化資源研究センターの研究事業

2015年度に文化資源研究センターが独自に実施した研究事業の概要は以下のとおりである。

- 文化資源研究センター会議を定期的実施し、文化資源プロジェクトの運営、進捗状況の確認、標本資料・映像音響資料等の管理・運用にかかわる協議をおこなった。
- 「情報統合型メディア展示の新構築」計画の策定に伴い、ビデオテークの更新案を作成するための情報をインフォメーションスタッフから収集するとともに、アンケートの設計をおこない、ビデオテークブースにて調査を開始した。また、ビデオテークについて直感的に理解してもらえるようなビデオ映像を制作した。
- 標本資料約34万点の資料管理名の重複を検証し、約5万件の標本資料名の英訳作業を実施し、標本資料データベースの多言語環境の整備のための準備をおこなった。
- 文化資源研究センターの研究員1名をカナダへ派遣し、博物館資料保存・管理に関する実践的研究活動の動向調査をおこなった。
- 文化資源研究センターの教員1名を台湾、フランス、イギリスへ派遣し、民族誌映画の製作・公開に関する国際的な状況を調査し、当該分野の専門家を対象にして情報交換をおこなった。
- 『文化資源研究センター活動報告2014』を発行した。
- イコム日本委員会 2015年度委員会・総会に出席した。

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、文化資源研究センターや情報管理施設の専門スタッフの支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2015年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1. 運営体制

1) 文化資源関連事業の体制整備

2009年度から再編を実施した文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設のプロジェクト的な業務」の3種類の 카테고리によって運用した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2) 本館展示新構築の体制整備

本館展示総括チーム及び各展示プロジェクトチームのリーダー等からなる拡大展示専門部会を開催し、新構築を円滑に進めた。

2015年度新構築分（中央・北アジア展示、アイヌの文化展示）について、実施設計に続いて展示施工をおこなった。

2. 文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクトは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の第2期中期目標・中期計画に沿って、本館の大学共同利用機関法人としての共同利用基盤を整備するとともに、本館あるいは関連する他機関が所有する学術資源の体系化を進め、共同利用を促進し、学術的価値を高めるための研究プロジェクトである。

プロジェクトは、5つの分野（調査・収集、資料管理、情報化、展示、社会連携）にかかわる研究開発、または研究成果の前記5分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

1) 調査・収集分野

ネパール関連のビデオテーク番組の制作

提案者：南 真木人

2013年度に撮影した素材を用いて、ネパール関連のビデオテーク番組1本および研究用映像（長編番組）1本を制作した。また、2016年1月に2週間ネパールにおいて映像取材をおこない、楽師カースト・ガンダルバの社会変化およびボカラ市のパイラヴ仮面舞踊に関する映像を撮影し収集した。

在日コリアン音楽の現状に関する映像取材

提案者：寺田吉孝

在日コリアンの音楽活動に関する映像取材を、彼らの集住地域（大阪市生野区、東京都豊島区）と活動地域（大阪府堺市、東京都小平市）において、計7回（11日間）実施した。

日本各地の軽業系民俗芸能に関する映像取材

提案者：笹原亮二

2016年9月開催の特別展「見世物大博覧会」における軽業のコーナーにおいて公開を予定している全国各地の軽業系民俗芸能のうちで、継獅子（愛媛県今治市）・くも舞（秋田県湯上市・男鹿市）・つく舞（茨城県竜ヶ崎）・囃子曲持（神奈川県川崎市）梯子虎舞（岩手県大船渡市）に関する映像取材を実施した。

中国雲南省の少数民族の儀礼とキリスト教文化に関する映像番組の編集

提案者：横山廣子

本館の文資プロジェクトでこれまでに取材した映像素材を編集し、中国雲南省の少数民族に関するビデオテーク番組を製作する2ヵ年計画の2年目であり、今年度は、短編4本および長編1本を制作した。

言語展示場の部分改修に伴う手話言語に関するビデオテーク番組製作

提案者：菊澤律子

言語展示場の入口にあるイントロダクション・ビデオのうち、「手話のはなし」について、不正確な部分を修正し、内容のアップデートをおこなった。

ビデオテーク番組「フィリピン北部バルバラサン村の音楽とくらし」（仮題）の編集

提案者：寺田吉孝

2008年度のフィリピン・ルソン島山間地域に住むカリंगाの音楽に関する映像素材に基づき、ビデオテーク番組「フィリピン北部バルバラサン村の音楽とくらし」を制作した。

研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」に基づいたマルチメディア番組の製作

提案者：寺田吉孝

2014年7月20日に民博講堂で開催した研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」の映像記録素材を編集し、マルチメディア番組（日本語版、英語版）を制作した。

和太鼓の製作プロセスに関する長編番組の製作

提案者：寺田吉孝

2014年度に文資プロジェクトとして実施した和太鼓の製作に関する映像取材で収集した素材をもとに長編番組を編集した。

カンボジアの大型影絵芝居スバエク・トム全7夜の上演記録映像（英語字幕版）の制作

提案者：福岡正太

カンボジアの音楽研究の第一人者であるサムアン・サム教授（パンニャシャストラ大学）と共同で、大型影絵芝居スバエク・トム全7夜上演記録映像に英語字幕を付した番組を制作した。

「ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼」に関する映像資料の編集と現地語版の作成

提案者：三尾 稔

ラージャスターン州の生活、信仰、儀礼に関する本館所蔵映像音響資料のヒンディー語版の製作をおこなった。また、既存のマルチメディア・コンテンツ番組「ラージャスターン州メーワール地方のくらしと信仰」の充実

を図り、その解説画面等の加筆をおこなった。

展示記録映像のあり方に関する実践的研究

提 案 者：日高真吾

昨年度までに確立した、展示記録パノラマ映像として必要な撮影ポイントの設定、及びコンピュータでの効率的な展示場再現が可能な画像の製作方法に習いパノラマムービーを製作した。展示資料の画像や詳細データを効率よく配置することにより Web 上で展示空間を違和感なく閲覧できるコンテンツとなった。

2) 資料管理分野

有形文化資源の保存・管理システム構築

提 案 者：園田直子

本プロジェクトでは、①有形文化資源の保存対策立案：総合的有害生物管理の考えに基づいた生物被害対策、②資料管理のための方法論策定：博物館環境の調査、収蔵庫の狭隘化対策、これら資料管理に関わる基礎研究・開発研究と事業を企画、実施、統括した。

東日本大震災で被災した文化財の保管環境に関する調査研究 4

提 案 者：日高真吾

新潟県村上市奥三面歴史交流館収蔵庫、宮城県気仙沼市旧月立中学校の文化財一時収蔵庫について、軽微な改修による効果を生物生息調査、塵埃調査、浮遊菌調査、有機酸等の空気環境調査の観点から検証し、その効果を明らかにした。

3) 情報化分野

京都大学学術調査隊写真コレクション・データベースの公開

提 案 者：吉田憲司

2011年度から館内公開をしていた「京都大学学術調査隊写真コレクション・データベース」について、テキスト情報の付与や写真資料追加等により内容を充実させた。更に、著作権処理の完了した22,316件の写真資料を「国立民族学博物館所蔵 京都大学学術調査隊写真コレクション・データベース」として2016年3月に一般公開した。

「大島襄コレクション」の整理とデータベース作成

提 案 者：飯田 卓

本プロジェクト予算では、写真資料用の包材の購入とデータベースの作成準備を進めた。また、5,272コマのデジタル化を別経費にて実施した。

「沖守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成

提 案 者：三尾 稔

アーカイブ資料に含まれるスライド写真のうち、デジタル化が未完了分のデジタル化を完了させた。その後、受け入れたスライド写真を全て収納用に梱包し、スライド写真収蔵庫に収めた。一方、外部資金を活用してスライド写真に関するテキスト情報の作成を進めて完了させた。デジタル写真データとテキスト情報を統合し、データベースを完成させ館内公開をおこなった。

佐々木高明（名誉教授）による写真資料の学術情報化プロジェクト

提 案 者：池谷和信

本年度は、すでにネガのデータ化が終了しているので、昨年度と同様に日本の焼畑の専門家に来館していただき写真の分析をおこなった。また、申請者は、佐々木高明氏のフィールドワークの原点ともいえる熊本県五木村を訪問して、写真に登場している古老に会うことができた。そこでの情報を得ることから、佐々木氏の撮影した写真類の構成を把握することができた。これによって、公開のための基礎的準備が整備されたことになる。

食文化データベース構築のための事前調査：立命館大学との学術交流協定に基づく

提 案 者：朝倉敏夫

立命館大学の国際食文化研究センターに所属する教授と共同で、両機関において食文化研究を推進するための一事業として、食文化データベースを構築するための事前会議を実施した。

三次元 CG を利用した民族建築デジタルアーカイブの構築

提 案 者：佐藤浩司

これまで文化資源プロジェクトで作製されたインドネシア諸民族の木造民家の三次元 CG はおよそ50点にのぼる。これら資料のデータベースを公開するにあたって、実際の図面と齟齬がある CG の修正をおこなった。

アチックミュージアム旧蔵資料の体系的整理と資源化

提 案 者：朝倉敏夫

創設時に民博が文部省史料館から受け入れた資料のうち、情報がわからなかったため未登録だったものの素性を、資料台帳との照合などにより明らかにした。

4) 展示分野

中央・北アジア展示及びアイヌの文化展示の新構築

提 案 者：吉田憲司

2008年度より開始した本館展示の全面的な新構築の最終年次にあたる2015年度は、「中央・北アジア」展示および東アジアの「アイヌの文化」の展示の新構築を実施し、2016年3月17日に公開予定であった。

南アジア展示及び東南アジア展示用電子ガイドコンテンツの製作

提 案 者：福岡正太

「南アジア展示」「東南アジア展示」の新構築に伴い、新たに必要となった電子ガイド用コンテンツ（日本語、英語、中国語、韓国語）を制作した。また、番号プレートを展示場に設置し来館者へのサービスを開始した。

特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」

提 案 者：朝倉敏夫

2013年度には日本の「和食」と韓国の「キムジャン文化」がユネスコ無形文化遺産に登録され、日韓両国において、「食」文化への関心が高まっている。また、2015年は日韓外交正常化50周年にあたる年であった。そうした状況において、韓国国立民俗博物館と共同で「食」をテーマとした特別展を開催した。

会 期 2015年8月27日～11月10日

会 場 特別展示館

主 催 国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館

共 催 大阪工業大学、京都造形芸術大学、韓国藝術総合大学

協 力 大阪韓国文化院、一般財団法人 千里文化財団

助 成 韓国国際交流財団、日本万国博覧会記念基金（公益財団法人 関西・大阪21世紀協会）、公益財団法人 日韓文化交流基金

入 場 者 29,834人

実行委員長 朝倉敏夫

実行委員 (館内) 丸川雄三、金昌鎬 (外国人研究員)、林 史樹 (特別客員教員)

(館外) 守屋重記子 (女子栄養大学)、李 エリア (早稲田大学)、奇 亮 (韓国国立民俗博物館)、金 永才 (韓国国立民俗博物館)、安 廷允 (韓国国立民俗博物館)

特別展「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」

提 案 者：日高真吾

本展示は、蠣崎波響筆「夷酋列像」の実像を明らかにするとともに、この絵画が描かれた18世紀の蝦夷地とその国際性を広く紹介するものであった。

会 期 2016年2月25日～5月10日

会 場 特別展示館

主 催 国立民族学博物館、「夷酋列像」展実行委員会 (北海道博物館、一般財団法人北海道歴史文化財団、北海道新聞社)、国立歴史民俗博物館

協 力 プザンソン市 (フランス)、松前町、一般財団法人千里文化財団

後 援 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、外務省、文化庁、北海道教育委員会、公益社団法人北海道アイヌ協会、NHK 大阪放送局

実行委員長 日高真吾

実行委員 (館内) 佐々木史郎、齋藤玲子、野林厚志、吉田憲司

(館外) 吉本 忍 (国立民族学博物館名誉教授)、内田順子 (国立歴史民俗博物館)、横山百合子 (国立歴史民俗博物館)、右代啓視 (北海道博物館)、山際晶子 (北海道博物館)

企画展「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」

提 案 者：佐々木史郎

ロシア連邦ハバロフスク地方のアムール河の河畔に残る古代の岩面画と、それを聖地、聖なるものとして今でも守り続ける先住民族ナーナイとのかかわりを、岩面画の拓本とナーナイの民族資料とともに紹介した。

会 期 2015年5月21日～7月21日

会場 企画展示場
主催 国立民族学博物館
共催 新潟県立歴史博物館 横浜ユーラシア文化館
協力 NPO ユーラシアンクラブ、北方ユーラシア学会、NPO アンコール・ワット拓本保存会、ロシア連邦ハバロフスク地方シカチ・アリヤン村、NPO メデ・センター、ロシア北方先住民協会
ハバロフスク地方支部
後援 在大阪ロシア連邦総領事館、在新潟ロシア連邦総領事館
実行委員長 佐々木史郎
実行委員 (館外) 浜田晋介(日本大学)、宮尾 亨(新潟県立歴史博物館)、畠山 禎(横浜ユーラシア文化館)、井出晃憲(京都大学)

特別展「大見世物展——騙るカラダ 騙るモノ(仮題)」の準備

提案者：笹原亮二

2016年9月開催の特別展「見世物大博覧会」の開催に向けて、展示内容の検討、展示資料の選定、各地の博物館・資料館との資料借用の交渉などをおこない、基本的な展示の内容と構成を確定した。

2017年度企画展「カナダにおける先住民文化の過去、現在、未来」(仮題)の準備

提案者：岸上伸啓

2017年に建国150周年の節目を迎えるカナダにおける国家と先住民の関係の変遷を歴史的に検証し、カナダにおける先住民文化の過去、現状そして未来について紹介する2017年度企画展の準備を実施した。

ビデオテークと標本資料関連データベースの連携と活用

提案者：福岡正太

本研究は、国立民族学博物館が収蔵する映像資料や標本資料の情報を館内外で手軽に閲覧できる「みんなくデジタルビューア」の実現に向けた技術的検討をおこなうものである。2015年度は、ビデオテークを組み込んだデジタルビューアを民博館内にて試験公開し、試作したコンテンツおよびインタフェースについて問題のないことを実証した。

みんなく電子ガイドのユニバーサル対応コンテンツの試作

提案者：福岡正太

より多様な人々にみんなく電子ガイドによる情報提供をおこなうため、主に聴覚障がいをもつ利用者を想定して、既存のコンテンツに実験的に字幕を付与した。

屋内位置情報技術を用いた統合電子ガイドの研究と開発

提案者：福岡正太

携帯端末で提供する次世代みんなく電子ガイドについて、携帯端末向け位置情報技術である iBeacon を用いた来館者の現在位置に応じて情報を提供できる環境を整え、実用レベルに準ずる環境の整備を目指した。

次世代ビデオテーク更新案の作成

提案者：福岡正太

ビデオテークの更新に向けて、利用者アンケートを設計して実施を開始した。また、インフォメーションスタッフ等へのヒアリングに基づき、来館者によるビデオテーク利用への心理的抵抗を減らすため、利用をうながす映像を実験的に制作した。

次世代ユニバーサルミュージアム展示空間における多様な来館者の知覚鑑賞開発と評価研究

提案者：吉田憲司

次世代ユニバーサルミュージアムにむけ、国の法律等からの外部評価、有識者や市民からの第三者評価、自己評価を統合する評価システムを構築した。また、この作業と連動するかたちで、多様な来館者に対応する展示空間内の動線誘導(モビリティ)手法の開発を進めた。

特別展「東日本大震災の展示(仮題)」の準備

提案者：竹沢尚一郎

特別展「東日本大震災の展示」の実施に向けて、民俗資料の選び出しと、展示紹介用パンフレットの作成をおこなった。

企画展『One Road——オーストラリアの砂漠が生んだアボリジニ・アート(仮)』準備

提案者：丹羽典生

本展示は、オーストラリア先住民のアボリジニ・アートを通じてオーストラリア史を問い直すとともに、オーストラリアにおける先住民社会の過去から現在までの変化を視野に入れつつ、絵画に映像資料を交えて紹介す

るものである。

言語展示場の部分改修

提案者：菊澤律子

手話言語による語りやお話の映像、世界12手話言語の単語が比較できるデータをビデオテークの番組として製作し、公開した。言語展示場には日本手話三方言による「ももたろう」の出だしの部分を展示してあるが、それぞれの全編、および他の語りについては、時間をかけてゆっくり観覧してもらえるように、ビデオテークの番組として作成した。

5) 社会連携分野

カムイノミ及び重要無形民俗文化財「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

提案者：齋藤玲子

当館所蔵のアイヌの標本資料の保管と伝承を祈るカムイノミをおこない、併せてアイヌ古式舞踊の演舞を実施する。また、工芸品製作の実演と解説をする「アイヌ工芸 in みんなく」を開催し、より深くアイヌ文化に親しむ機会を提供した。

みんなくくの改訂版制作

提案者：上羽陽子

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出をおこなう学習キット「みんなくく」は、パック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂をおこなう必要がある。2015年度は「アンデスの玉手箱（2002年度制作）」「インドのサリーとクルター（2002年度制作）」を改訂した。

3. 文化資源計画事業

「文化資源計画事業」は、研究成果を普及することを目的とした事業で、2つの分野（資料関連、展示・社会連携）に分けられる。

1) 資料関連分野

「朝鮮半島の文化」に関する映像資料の開発と制作：韓国国立民俗博物館との交流事業

2015年度は、4年計画の3年次として、本館「朝鮮半島の文化」に関する映像資料収集の新たなシステムを構築するため、韓国国立民俗博物館との交流協定に基づき協議をおこない、韓国学中央研究院大学、中央大学、ソウル芸術大学で映像人類学を専攻する学生たち3チームに研修を受けさせ、2016年3月までに作品を制作、提出させた。今後、本館においてビデオテーク番組として編集する予定である。

標本資料の寄贈受入

- ・中国青海省西寧市互助土族自治县に居住するトゥー（土）族の女性の衣装と付属品の寄贈を受け入れた。
- ・中国青海省のチベット仏教信者が持仏入れ容器に入れる小型のカード状仏像写真と「カタ（礼布）」と呼ばれる白い布の寄贈を受け入れた。
- ・中国地域少数民族生活資料の寄贈を受け入れた。そのうち、「ヤオ族（「盤瑤」）女性用衣服」は故竹村卓二本館名誉教授が、広東省乳源瑶族自治县を訪問した際に現地の政府から寄贈を受けたものである。
- ・日本では、現物がほとんど知られていないクロテンという動物の毛皮を展示場で広く公開することで、極東地域の文化理解を促進することに意義があるため、ロシアクロテン毛皮資料の寄贈を受け入れた。
- ・チェンマイ国立博物館のニタヤー・カノックモンコン館長がタイ国チェンマイで入手したタイ祭祀用人形を、本館への標本資料として寄贈され受け入れた。
- ・アメリカ南西部先住民ホビ製木彫人形資料の寄贈を受け入れた。アメリカ南西部先住民ホビが制作した2体の木彫人形が寄贈されたことにより、既存の約280体の同様の資料との比較研究の対象となった。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「北海道アイヌの儀礼具等資料」の寄贈を受け入れた。
- ・2014年度の秋季企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」を開催するために国立グリーンランド博物館文書館が展示に使用したカラーヒット民族（グリーンランド・イヌイット）制作のドラムとバチの寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「インド撥弦楽器（シタール）、土人形、コイン等」の寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料としてフィンランドの民族楽器カンテレ（ツィター属の撥弦楽器）1点の寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として、モンゴルの社会主義時代に、子供をたくさん産んだ母に与えられるメダルと、トゥバ共和国のメダル習慣を踏襲した近年のメダルの寄贈を受け入れた。
- ・国立民族学博物館所蔵資料として「北海道アイヌの刺しゅう入り袋物資料」の寄贈を受け入れた。

- 国立民族学博物館所蔵資料として「ロシア・アイコンとチェコ・復活祭用卵、とうきび人形、ルーマニア・バグパイプ」の寄贈を受け入れた。
- 国立民族学博物館所蔵資料として「標交紀所蔵 世界のコーヒー器具コレクション」の寄贈を受け入れた。
- 故江口教授の収集した貴重なマリ共和国の土器（靈魂受入用）の寄贈を受け入れ、国立民族学博物館のアフリカ資料の充実を進めた。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、贈答用の布やスカーフ、装身具などを受け入れた。これらの資料は、「中央アジア」セクションの「カザフ草原の暮らし」「イスラームと人生儀礼」で活用される。
- 中央アジアとその近隣地域に関わる資料を充実させるため、手刺繍が施されたアフガニスタンの衣装の寄贈を受け入れた。民族は特定できていないが、アフガニスタンから中央アジアにかけて居住するトルクメンの衣装と類似性が高い。緻密な手刺繍をおこなう人は現在では少なくなっており、現地の生活文化を伝える貴重な資料である。
- 2015年5月21日に開催された企画展『岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン』の開幕式にて、シカチ・アリヤン村のヴィクトリア・ドンカン氏から寄贈されたロシアシカチ・アリヤン村ナーナイ民族関連資料5種類12点を受け入れた。
- 収蔵点数の少ないロシア・極北の資料を充実させ、より効果的な展示をおこなうため入手の難しい極北毛皮資料の寄贈を受け入れた。
- 収蔵点数の少ないロシア・極北の資料を充実させ、より効果的な展示をおこなうためロシア極北のチュクチの毛皮等資料の寄贈を受け入れた。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、ウズベキスタンの長衣や帽子などの衣装を受け入れた。ウズベク、トルクメン、キルギス（クルグズ）など多様な民族の帽子が含まれており、各民族の暮らしの特徴を伝える資料である。新展示公開後のワークショップなどで活用を予定している。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、ソ連時代のウズベキスタン観光絵葉書を受け入れた。1980年代のタシケント市の様子が分かる貴重な資料で、日本人抑留者が建設に携わったナヴォイ劇場などの建物の絵葉書も含まれている。
- 中央・北アジア展示新構築へ向けて、モンゴル国で現在使われている仏具などを受け入れた。「モンゴル」セクションの「仏教とシャマニズム」サブセクションで、仏教の現在を示す資料として活用される。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、カムイノミ関連の儀礼具等資料の寄贈を受け入れた。
- 端信行氏が1960～90年代にかけてアフリカ各地で調査した際に撮影した民族誌写真6,974枚と映像記録2作品の寄贈を受け入れた。
- 本館のモンゴル地域の資料の充実、特にモンゴルの都市生活に関する日用品を補うことを図る目的でモンゴル生活道具資料を受け入れた。とくに、チンギス・ハーンの商標を用いたモノは、現代におけるチンギス・ハーンの文化表象について明示する貴重な学術資料である。
- 国立民族学博物館所蔵資料として「マダガスカル生活道具資料」の寄贈を受け入れた。変化の著しいマダガスカルの生活文化を知るうえで貴重であり、2008年から2009年にかけておこなわれた標本資料収集を補完した。
- 中央・北アジア資料を充実させるため、ウズベキスタンの刀剣の寄贈を受け入れた。この刀剣は、過去に寄贈を受け入れたウズベキスタンの衣装とセットで、祝典で用いられたものである。中央アジアで刀剣が男性の装身具として重要であることを示す、貴重な資料である。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、日本トカラ列島（口之島）編組品（かごなど）の資料を受け入れた。すでに民博所蔵となっている、1934年に渋沢敬三らアチックミュージアムが同じ口之島で収集したものと比較することで、80年近くもの時間的経過が生活などに与えた影響を知ることができる。
- 竹製和竿であるヤマメ釣り用の釣竿を標本資料として受け入れた。もはやほとんど製作されていない様式であり、多くの釣竿が振り出し式になってしまったこんにち、本資料のような継ぎ竿はめずらしく、手づくりの道具で川漁をおこなっていたようすを語る資料として貴重である。
- 公益社団法人北海道アイヌ協会（旧・社団法人北海道ウタリ協会）の活動の記録をまとめた『アイヌ史 活動編』をはじめ、機関誌『先駆者の集い』や「国際先住民の日」ポスターなど、活動の節目となったイベントに関する印刷物の寄贈を受け入れた。
- 「アイヌの文化」展示の新構築で、現代のアイヌ民族の文化復興の運動について紹介するため、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が編集・発行しているさまざまなアイヌ語学習教材の寄贈を受け入れた。
- 「アイヌの文化」展示新構築で、現代のアイヌ民族の権利回復や文化復興の運動について紹介するため、そ

の先駆者として活躍した人物の著作と、文化継承にも寄与した観光に関する書籍やみやげ品を展示するために受け入れた。

- 日韓外交正常化50周年を記念して開催した特別展「韓日食博——わかちあい・おもてなしのかたち」において、日清食品ホールディングズより借用し展示した、日本の食文化を代表するラーメンの屋台の寄贈を受け入れた。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、韓国における民族衣装である「韓服」、ことに男児、女児用の子ども儀礼にかかわる衣裳を受け入れた。
- 東日本大震災で被災した斎藤報恩会博物館の閉館にともない、斎藤報恩会が戦前に学術助成をした南洋学術調査隊がヤップ島で収集した石貨3点の寄贈を受け入れた。
- 本館常設展「朝鮮半島の文化」を新構築するに際し、「韓国 トル儀礼用品」の寄贈を受け入れた。伝統的なものと現代的なものが混在していることが韓国人の観覧者から問題視されていた点を解消するために寄贈されたものである。
- 中央・北アジア展示新構築に向けて、「中央アジア」セクションの「カザフ草原の暮らし」の定住家屋の内部再現のため、枕カバーを受け入れた。枕はクッションとしても用いられ、カバーには多様なパッチワークが施される。天幕内でも定住家屋内でも使われており、現地の暮らしの変化と連続性を示す資料の一部として展示場で活用される。
- 新構築にふさわしい、新規資料の展示となるため「モンゴル 馬乳酒用の壺」の寄贈を受け入れた。
- 京都の彫金師である園幸雄氏が使用していた彫金用具一式について、2014年度の映像番組制作、2015年度の聞き取り調査の整理の完了をもって、標本資料として受け入れた。
- 東北地方の神楽を中心に研究してきたドイツ人研究者ギュンター・ツォーベル氏がこれまでの東北地方の神楽調査で収集された神楽面等の寄贈を受け入れた。本館で収蔵することにより、現在注目度が高まっている東北地方の芸能研究の一助をなすことができる。
- 国立民族学博物館所蔵資料として、中牧弘允本館名誉教授が在職中に収集した世界各地のカレンダーの寄贈を受け入れた。

2) 展示・社会連携分野

巡回展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」

2014年2月～6月に国立新美術館にて、また同年9月～12月に本館特別展として実施した「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展の巡回展を、福島県の郡山市立美術館にて開催した。

館外企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」

2013年度7月から11月にかけて民博企画展として開催し、大きな社会的反響を呼んだ「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」展を、2015年10月17日から11月23日まで、東京藝術大学大学美術館にて開催した。

新構築した中国地域の文化展示場の部分改修

2013年度末に新構築した中国地域の文化の展示場に関して、その後の点検を経て、修正が必要と判断された諸点につき部分改修をおこない、展示内容の改善をはかった。

新構築した「朝鮮半島の文化」展示の部分改修

2013年度に新構築した本館展示「朝鮮半島の文化」展示の構成およびデザインの一部を、観覧者アンケートおよび館外の専門家から寄せられた意見にもとづき、より効果的なものに改めた。具体的には、「住の文化」セクションと「知の文化」セクションを、より親しみやすいものにした。かつ全体で、解説パネルを計5枚、写真パネルを6枚、案内パネルを4枚追加した。表記に問題があった解説パネルも、4枚修正した。また、来館者からの要望に応え、展示内のモニターで提供している展示解説映像について、英語版と中国語版を作成し、利用できるようにした。

日本の文化展示「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニホン」の部分改修

日本の文化展示場のなかで、「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニホン」セクションの部分の改修について、写真パネルの修正、来館者がふれることによる損傷事故を防ぐための演示方法の修正をはじめとする作業をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

民博でおこなわれている各種研究活動ならびに展示の内容を、来館者を中心とした利用者に、より効果的、効率的に理解してもらうと同時に、一般利用者からの様々な意見や情報を民博内にフィードバックさせることを目的としたワークショップの実施、ならびに展示新構築にともなうワークシートの更新作業やワークシート新

規作成に向けた調査などを実施した。

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体である MMP（みんなくミュージアムパートナーズ）の活動支援をおこなった。

3) その他

年末年始展示イベント「さる」

年末年始期において干支を題材にした展示ならびに関連催事をおこない、来館者に季節感を伝えるとともに、世界各地の「さる」と人びとのかかわりを示し、民博の教職員を対象にした、展示目的・構成の設定から展示資料の選定、および展示に至る活動の研修をおこなった。

4. 情報管理施設のプロジェクト的な業務

「情報管理施設のプロジェクト的な業務」は、情報管理施設が実施する文化資源に関する研究支援業務である。

みんなく映像民族誌の作成及び配付

民博製作のビデオトーク番組や研究映像から11本を選び、みんなく映像民族誌第18集～第21集として4枚のDVDにまとめた。これを800セット製作し、図書館や研究機関などに配布したほか、テーマに応じ個別のDVDを学会等684カ所に配布した。

標本資料の撮影等業務

標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、4,715件の撮影、計測、画像の利用及びそれらに付随する業務をおこなった。

〈実施内容〉フォーラム型情報ミュージアム関連資料、新構築に係る東南アジア、南アジア展示場撤去資料、アイヌの文化、中央・北アジア展示場の撤去資料及び新規展示資料、2015年度新規受け入れ資料等常設展示場新構築撤去資料の点検・クリーニング・再配架及びデータ整理作業

2014年度の新構築（東南アジア展示、南アジア展示）にともない撤去された約1,850点の資料の状態のチェック（点検）、長期間展示されていた資料に関する情報のデータ作成および適切なクリーニングをおこない、収蔵庫に再配架した。

第3収蔵庫収蔵資料の配架見直し及び再配架作業

当初2015年度の実施を予定していたが、より緊急性の高い第1収蔵庫再配架作業に注力するため、2016年度に改めて実施することとなった。

標本資料の補修・保存処理

現在、常設展示場で展示されている資料の点検や、資料の他館への貸出等での資料点検の際に発見される資料の破損、汚損などの異常に対して、適切な処理を随時おこなった。また、新構築あるいは特別展・企画展に選定された資料、緊急に補修する必要がある資料などの補修をおこない、資料を展示可能な状態に復した。

みんなくく運用・保守

147の学校や社会教育施設に、延べ201回の貸出をおこなった。また、貸出先での紛失や破損にともなう補修、老朽化した資料の交換等をおこなった。

